Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞出原隆俊・小林幸夫注釈『鷗外近代小説集第五巻』
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 159-159
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70924
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

出原隆俊・小林幸夫注釈『鷗外近代小説集　第五巻』

西尾元伸

森鷗外は文久二（一八六二）年生まれである。鷗外の生誕一五〇年を記念して、平成二四（二〇一二）年から、『鷗外近代小説集』（岩波書店・全六巻）が順次刊行されている。〈近代小説集〉というタイトルが示す通り、鷗外自身が生きた時代を舞台とした作品を集めたものである。特色として、初版単行本の構成を重視していることが挙げられよう。本書は、その第五巻である。

さて、『鷗外近代小説集　第五巻』に収録されている作品は、「一つの筐に入った二分冊」（『走馬灯』解題・出原隆俊氏）という、二つの作品集『走馬灯』『分身』（大正二（一九一三）年七月・籾山書店）に収められたものである。

収録作品を挙げると以下の通りであり、巻末に各作品集と作品の解題が付されている。

『走馬灯』

藤鞆絵／蛇／心中／鼠坂／羽鳥千尋／百物語／ながし

『分身』

妄想／カズイスチカ／流行／不思議な鏡／食堂／田楽豆腐

また、本書の特色として、見開き頁に施された注釈が挙げられる。各作品の注釈のご担当は、『走馬灯』が出原隆俊氏、『分身』が小林幸夫氏である。本書の注釈は、固有名や外来語、現代の読者には難解な表現までを含む、非常に細やかなものである。さらに、単に語意を示すにとどまらず、作品内の表現と、作者の問題意識との関わりを指摘する場合も多い。

例えば、『走馬灯』中の『蛇』を見ると、その注釈の一番目の項目には「己」が挙げられ、「一人称小説で「己」（おれ）が使われるのは『蛇』『羽鳥千尋』『流行』『不思議な鏡』『沈黙の塔』などで、『蛇』『羽鳥千尋』を除いては、風刺性・寓意性の濃厚な非現実的趣向のもの。「僕」を一人称とするものと主人公の位相が異なる傾向がある」と記されている。加えて、巻末の同作品解題においては、鷗外の実体験とデフォルメをめぐって、「人称が「僕」ではなく「己」であることも、この人物が鷗外そのものとはやや距離があることを思わせる」（出原氏）とあり、「己」の語の選択に重要な問題が潜んでいることを示唆している。

なお、二つの作品集には、『走馬灯』が鷗外の周囲と、『分身』が鷗外自身のことと思わせる作品が収められるという「編集意識」（『分身』解題・小林幸夫氏）が見られるという。近しい時期に刊行された『意地』（大正二年六月）、『かのやうに』（大正三年四月）などの作品集とも関わる点である。単行本刊行時の構成にも鷗外の思考は窺える。そこに、細やかな注釈が付されることで、当時の鷗外の問題意識が浮かび上がっている。

（岩波書店、二〇一三年一月、三五一頁、三、八〇〇円）

（にしお・もとのぶ　本学大学院博士後期課程修了）